

# 香月牛山の医の倫理観

The View of Medical Ethics of KAZUKI GYUZAN

関根 透

Toru SEKINE

「鶴見大学紀要」第47号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成22年 3 月）別刷

## 香月牛山の医の倫理観

The View of Medical Ethics of KAZUKI GYUZAN

関 根 透

Toru SEKINE

### はじめに

平成21年6月に佐賀アバンセで「第110回・日本医史学会総会」が開催され、その折に、香月牛山が享保年間に著した『習医先入』(3冊)を入手した。帰途は新幹線を利用したので、車中でそれを全部読むことができ、夏休み期間中にも熟読する機会があった。本来なら、本年の紀要には、「関寛斎の医の倫理観」についてまとめて、執筆する予定であったが、北海道・陸別の「関寛斎資料館」を訪ねる機会が遅れてしまい、まとめる時間的な余裕がなかった。そこで、まだ記憶にも残っているので、香月牛山の『習医先入』(3巻)を中心として、「香月牛山の医の倫理観」についてまとめることにした(写真①)。



写真①

### 香月牛山の人間像

香月牛山(1656~1740)は『習医先入』3冊を享保18年(1733)に刊行したが、そこには、香月牛山の医療倫理を基にした医師の教育論が示されていた。彼は北九州の碩学で、多くの著作を著している。難波恒雄氏の著作目録(『近世漢方医学書集成 61 香月牛山』、p35~p37)によれば、没後刊行された著作を含めて、30点以上の著書を著している。その若干を紹介すると、『婦人寿草』3冊(1708)、『牛山活套』3冊(1779)、『牛山方考』3冊(1782)、『小児必用養育草』5冊(1798)、

『医学鉤玄』3冊(1714)、『老人必用養草』5冊(1793)などである。特に、養生に関する著作『婦人寿草』、『小児必用養育草』、『老人必用養草』は仮名交じりの和文体で示されており、当時の啓蒙的な役割を果たした著作と思われる。これらの著作は再版を重ねており、大衆のための民間療法を示した健康書である。

さて、香月牛山は香月重貞の次男として明暦2年(1656)10月7日に、福岡県遠賀郡植木で誕生した。名は則真、号を牛山、啓益、貞庵と称していた。彼は有名な貝原益軒から儒学や本草学を学び、藩医の鶴原玄益から医学を学んでいる。30歳頃から大分県・中津藩の小笠原氏の侍医を務めている。この間、貝原益軒と親交を深め、貝原益軒の妻・東軒夫人の診療にも当たっている。香月牛山の『医学鉤言』の序文には、貝原益軒が医師としての使命を書いている。そこには、医療とは人の生死に係わる、人民にとって重要な職業であることが示されている。また、許胤宗の言葉を引用して医の倫理の標語「医は意なり」も載せている。その標語の意味は「思慮を精しくして、理を究め、生を好み、徳を積むことを第一とする」という意味で、「医を学ぶ者は心を用い、思慮を精しくして十年以上に亘って医学技術の研鑽に務めよ」と教えている。更に、益軒は香月牛山に「怠ることなく、倦くことなく医学を勉励して、医学を学ぶ者の規範を示せ」と、『医学鉤玄』で述べ、最後には、「医学の精要を示し、医学を学ぶ者の軌範を示し、論を立て、病を治す法を示し、薬の処方を示し、後学に多大の恵みを与えている」と説いて、「正徳辛卯歳冬至日筑前後学八十三益軒貝原篤信書」と結んでいる。

香月牛山は44歳に中津城主に仕えていたが、眼病を理由に辞して、京都に赴き、開業している。京都で彼の名声が高まったのは、大覚親王の難病を劇薬を用いて吐瀉させて、快癒させたことにあった。牛山は専ら医学の研鑽に勤め、結婚をせず、彼は養子・則貫を迎え、則貫に医学を教えたり、医学書を読んだり、原稿を書いたりしていたようである。その後、享保元年(1716)に小倉藩の小笠原侯から要請があると、養子の

則貫を推薦している。しかし、牛山は養子の則貫が若くして亡くなると、菩提寺の浄土宗の弁阿が創建した吉祥寺に寿塔を建立し、小笠原候に仕えて、厚遇されている。そして、香月牛山は元文5年（1740）3月16日に85歳の高齢で亡くなっている。彼は結婚もせず、医療に献身し、医学の蘊奥を求めた碩学であった。現在、小倉の円応寺には弟子たちが建てた香月牛山の墓があるが、過去帖によると養子・則貫の墓となっているらしい。なお、吉祥寺には「浩譽牛山翁之墓」と言われる寿塔の墓石もある（写真②）。



写真②

さて、香月牛山は李東垣と朱丹溪が説いた「李朱医学」を重んじる後世派の医師であった。そのため、牛山は自らが信じている実践的な臨機応変の医療を行っていた。こうした臨機応変の医療観は多分、貝原益軒の影響を受け、「医は意なり」の考え方を実践していたとも推測できる。牛山の著『堂雪余話』には、次のようなことが示されている。「中華の医書とて誤謬少なからず、古人の説とて精確なるもののみにあらず」とあり、自分が信じる医療を、各流派を超えて最良の医療法を選択して、実践していたものと思われる。香月牛山は『牛山活套』（巻之上）の冒頭の自序には、「医は民之司命百工の長。宰相は蓋し仁之術也と云う」と述べ、自分が信じる医の倫理観を信条として行っていたものと思われる。一方では、「眼目の方は東垣に本づきて治すべし。獨り眼病のみに非ず、諸病共に東垣の治方に因って治すべし」と李朱医学の立場も強く示している。多くの医師は自分が薬に対して拙いのに偶然の快癒を自慢したりすることについて、彼は「傷寒約治」の章で、人參の使用法において、「自然と熱尽きて癒ゆる類あれば、其れを証拠にして己が術ヲ銜いて能く募る。・・・術なしとて己が術の拙きを人參にて飾る。病家は素より愚昧なる者多ければ其理をさとらず。・・・貧家は婦を売り子を販ぎて父母の命を救わんとす」（巻

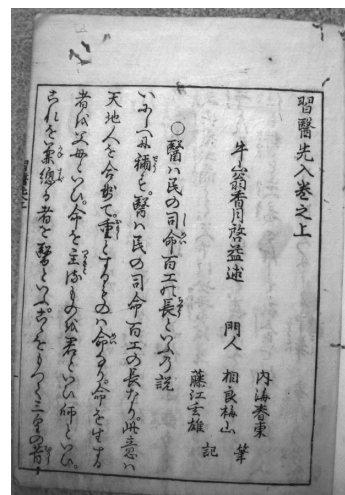
之上・p334）と述べて、患者の無知をいいことにしている医師を厳しく批判している。香月牛山は専ら自分の信じる経験の上に立った実践的な医療を行い、経験を基にした自らの医の倫理観をもって若い医師の教育を行っていたと思われる。

なお、これから詳述する『習医先入』は、医師を教育するための医の倫理観を述べた医学教育論で、至る所に彼の医の倫理観を見ることもできる。

### 『習医先入』の「巻之上」

香月牛山は享保18年（1733）に門人・内海春東、相良梅山、藤江玄雄の協力を得て『習医先入』3冊を出版している。彼は「習医先入叙」では、眼病で中津藩を去って京都に赴き、そこで多くの医師や医書に遭遇し、医学を教育する方法を知ったので3人の弟子の協力を得て著した、とある。

「巻之上」では、6つの項目をたてて医学の使命、本質、医学教育のあり方などを説いている。まず、冒頭の「医は民の司命百工の長といふの説」の項では、「いにしへに称す 医は民の司命百工の長なり 此意は天地人を合せて 重とするものは命なり 命を生ずる者を父母といひ 命を主るものを君といひ師といひ これを兼総る者を医といふ」と医師の本質を説いている。薫奉（杏林の道）の例を挙げ、上医は未病を治すこと、良医は疾苦をたすけ仁恵をなすこと、医は仁の術を行える職業である、と述べている（写真③）。



写真③

「医を学ぶ人を選ぶべきの説」では、幼少より利口で聡敏で剛健で書物が好きな子どもを選んで医学を勉強させるのがよい、と説いている。障害者（不具者）は徳があり、学文を好むので、思いの外に良医となる。従って、「童の時より其性質をよく見定て 其人を選び医をならはしむべし」と医師を志す子供の選び方を教えている。

更、当時の儒教社会を反映して「親につかふまつる

者は医をしらずんば有べからずといふ説」の項では、「[医術を知極て人に施す 医師のごとくせよといふにはあらず 大概医の道理をしりて その医師の良庸をしりわきまへよとの教なるへし]と述べている。

「[医師に其品類数多あるの説]では、明医、名医、隱医、徳医、時医、奸医、福医、淫医、世医などの医師がいるので、患者は医師をよく見分けなければならない。当時、身分制度が厳しい時代にあつて、学者と医者になることは、結構自由になれた職業であつた。その上に、医師の最低レベルを保証する国家試験があるわけでもなかったので、医師の実力には相当な格差があつた。従つて、患者の家族は病人を託す立派な医師を選ぶことが重要であつた。況や、儒教社会にあつて、父母の病気を癒す医師を選ぶことは親孝行にも通じる重要な行為であつた。

「[医に十三科あるの説]では、[大方脈、小方脈、風科、婦人科、産科、口齒科、咽喉科、金鍼科、傷折科、瘡科、眼科、鍼灸科、禁祝科 此十三科の名目]とある。「[巫を信じて医を信せざるの説]では、最後に「扁鵲の言に 巫を信じて医を信せざるのは ひとつの不治なり」の言葉を引用して、死後の世界に係わる宗教家より現世の存続を求める医師を信じることを教えている。

#### 『習医先入』の「巻之中」

「巻之中」でも、具体的に立派な医師になるための教育観を示している。最初の「[医三世ならすんは其業を服すべからすといふ説並に老医の説]の項では、昔から三代続いた医師の家系でなければ薬を調合してはいけないといわれていることを説明している。その理由は「三世とは祖父より三代相伝するときは 人の病を治する事多く 薬を用ることも熟する故に 其効すでに試み得て疑惑なし」と述べ、歴史的に「三」という数字がよい理由を挙げている。ここでは「三」を中心に、鍼灸、本草、素問難経を勉強した医師を「三世医」といい、伏羲、神農、黄帝の書を「三墳」といい、時に李東垣、朱丹溪、滑伯仁を「三世医」と述べ、三書を読み、三代続いた医師は誤りも少ないと説いている。

「[良医は福医にしかずといふ説]では、福医とは奸医、淫医の紛れ者で、立派で繁盛しているように装う医師だから、病人や家族は医師をよく見分ける技術を心得なさいと説いている。

「[三度肱を折て良医となるの説]では、孔子の言葉であると述べ、『楚辞』には「九度肱を折て良医となる」と述べていると説いている。つまり、「[肱を折る]とは、過ちを悔いて、道理を知ることであり、苦勞してこそ良医になった医師の証拠であると述べている。

「[医師幼より学をなす次第の説]の項では、十歳より「千字文」を暗誦させ、その後、「四書」、「小学」、「近思録」、「五経」などを素読させ、儒書が読めるようにする。そうすれば、自ら医書の素読もできるようになる、と教えている。どんなに聡敏な者も素読が疎き者は医書が理解できないから医学知識も医学技術も上達しないと説いている。十歳から十八歳ぐらいまでに医師の基礎的な修行をしなければならない。

「[医師十七八歳より以後の学問の次第の説]では、十七八歳より立派な学者に従つて儒書や医書を読んで、毎日勉強すべし。一日に三分の二は医書、三分の一は儒書がよい。「[医書に心を入れて学ぶべき]で、まず「[内経]」、「[素問]」、「[靈樞]」、「[本草綱目]」、「[千金方]」などの読むべき医書を挙げている。特に李東垣、朱丹溪の李朱医学の流れを駆む香月牛山は朱氏の『局方發揮]を重要な医書として挙げている。また、医の倫理の標語「[医は仁術なり]」の流行をなした原典である徐春甫著の『古今医統大全]を挙げ、「[医に博き書にして 治療の外種々の事術ヲ載たり 博学の便となる書なれば涉獵すへし]」と述べている。

「[明師に就て学ぶにあらずんば良医には成がたきの説]では、「[医を習ひ次第 初に素読をなす事は 儒家者流の教に異事なし 十五六歳より医書の素読をし講釈をきき 二十歳より三十歳までは 儒書医書取ましへて涉獵する事]」と述べ、扁鵲や倉公の例を挙げて説いている。また、病人に教わるのを批判する師もいるが、「[病人によりて教るの外他なし]」と述べ、更に「[近世師に志の厚き人は ひとり安藤省庵の身なり]」と述べている。安藤省庵とは、柳川藩に仕え、亡命した朱舜水に礼を以て迎えた碩学である。

次の「[医師三十歳より治療の業を専らとすべき事]では、初めて師から離れてひとりで患者を診るので、十分に自分を引き締め、医書にも親しみ、病者に施し、徳を納め、医療の術に終わりが無いことを心得るべきである、と結んでいる。まさに現在の医師にも通じる医の倫理観を示している。

#### 『習医先入』の「巻之下」

最後の「巻之下」は、香月牛山の医の倫理の教育観が最も多く示されている巻である。まず、「[医師平生の心行慎むべきの説]」が示されている。この冒頭では「[医を業とする人は 其心行を慎み 其徳を収むへし・・・人の病のいたむ事を 我身の上になぞらへさそたえからんとおもはは 招くに遅く行事あらんや貧富をとふ事なく 貧賤をあなとらず 豪貴に謗ふ事なく 人の識能をねたむ事なく 人の恭慢を議する事なく 前医を謗るへからず]」と医師の病人に対する倫理観を説いている。また、室町時代の意安の例を挙げ

て「嵯峨の意安は 病人を誤り治する事あれば 其年中療治をやめ蟄居して 医書を考へ読て工夫を加れたるよし これを恥をしり義を重んずる人といへり」と彼の謙虚さと反省を示した医の倫理を伝えている。また「医師の第一慎むべきは 酒宴遊興の事なり」と述べ、兼好法師は「酒の害」を挙げて戒めていると説いている。

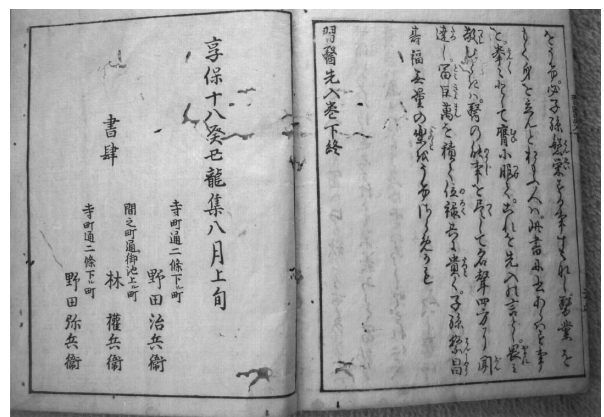
「公武諸侯の医師常に心得へきの説」では、諸藩に使えている医師の倫理を挙げている。「医師となつて其術の拙き」を知ったら、他の職業と異なり、人命に係わることなので、更に勉強して、それでも上達しなかったら、「不忠不義の罪に陥るので、慎むべき事なり」と、この項で結んでいる。

「国牧の医師たらん者心かけの説」では、「虚言妄語を慎むべき事」、「医師の分外をする事は恥」、などを挙げ、「文学詩連句和歌、茶道」などの教養も大切であるが、それに溺れてはいけないと教えている。「医師はやんことなき人の御前へも出る者なれば 衣類は垢つかす 刀脇指印籠巾着等に至るまで いかにも奇麗にし」と医師の身だしなみについても説いている。最近の医学教育でも、清潔な服装、女性の化粧や髪形、爪などの身だしなみについて医療面接で教えているが、牛山も専門職としての考え方を説いている。

最後の項の「医師謝賃を受ける心持の説」では、香月牛山は自らの医の倫理に関する教育観を最も多く展開して、まとめている。当時医療は渡世の術とも言われたので、現実には仁術を実践しない医師が多くいたからこそ、「医は仁術なり」が声高に叫ばれたのであろう。そこで、彼は謝礼に中心をおいた医の倫理を若い医師に教育している。「其治療せずしても その謝礼とて金銀衣服酒肴等を 其分限よりも過分に奉ずる事 主君の病を治してさえも謝辞を給はる」ので、藩に仕える医師は、日頃から過分の報償は慎まなければならないと戒めている。世間には「家産乏しき類の者多し」、また「災害も多い」ので、「貴賤貧富をえらはす治を施すべきであるとも説いている。酒肴や金子を要求するのは、「医は仁術にして 謝賃の多少に心をゆすものにあらず」と述べ、施療であるから多少に関係なく謝礼は感謝して頂戴するのはかまわないと、医師の生活にも配慮して「医は仁術なり」を教えている。町医師は富豪の態度悪しければ、治療を論じた後で、道理を説き、それを理解しない時は、心静かにして対処すべきであると説いている。また、患者の家の分限より多少があることも知らなければならないと教えている。牛山は「医たらん者必利欲に耽り 卑劣の志を発する事なかれたた仁術にして施薬を事とするとおもふときは をのつから其謝賃来り集り富を重ぬるなり」と述べ、『医箴』の文を書生たちに示したと述べている。しかし、「僧道

貧士医の求めは 謝賃ありといふとも一毫も受くることなかれ」と施療の精神も示している。また、自分が京都にいた時の春、洛東の方丈の療治をした折に、謝礼として白銀若干を持ってきたが、受取らなす返そうとした。しかし、翁の立派な操や志をやぶるものはよくないと考え、謝辞を返す返さないは、「それは人によるべき事なるべし」と考えて受取った、述べている。

「謝賃をうけて身の私用となさざる時は受る事なかれ」と述べ、「聖人さへも富はわか欲する所」であるので、「医業をもて身を立てんとおもふ人は 此書に書あらはす事を 先入の言として 畏み敬むときは 医の能事を尽して名声四方に聞達し 子孫繁昌寿福無量の楽をうけさらめかも」と結んでいる。



写真④

以上が、『習医先入』の3巻に示されている香月牛山の医の倫理の教育観である。

## まとめ

香月牛山は儒教社会の時代にあつて、患者の父母に対する「孝の心」を大切にし、医療を「施療」と捉えている。『牛山活套』の「巻之上」では、「父母ノ病ニアリテハ否云ヒ難ク貧家ハ婦ヲ売り子ヲ販キテ父母ノ命ヲ救ハント況ヤ富家ノ財ヲ費ス事アゲテ数エ難シ如是金銀ヲ費スノミカ病苦ヲ増シ百年ノ天数ヲ天折ス嗚呼可嘆云々・工夫ヲ詳ニシテ治療スベシ可怖可慎」（『牛山活套』・近世漢方医学書集成61・香月牛山・p334）と示している。

香月牛山の医の倫理観は残念ながら、私は寡黙にしてあまりよく知らない。しかし、この『習医先入』には、彼の医の倫理観がこの教育論に満載されており、日本の医の倫理を研究の対象にしている者にとっては得ることが多かった。従って、たまたま佐賀の学会の折に『習医先入』を入手し、帰路にそれを読み、現在と変わらない医の倫理観をもっていることに関心があったことも、この拙文を書くようになった次第である。解釈の誤り、知識不足などが多くあるかもしれないので、読者の忌憚ないご教示を賜りたいと思っている。